

住民の活動と意識変化に着目した協働型集落支援活動の効果に関する研究

福島県南会津町たのせ集落での活動を事例として

EFFECT OF COLLABORATIVE VILLAGE SUPPORTING ACTIVITY FOCUSING ON ACTION AND CONSCIOUSNESS CHANGE OF INHABITANTS

Case study on Tanose village activities in Minamiaizu town, Fukushima prefecture

黒沼 剛*, 志村 秀明**

Go KURONUMA, Hideaki SHIMURA

This study aims to consider effects of collaborative village supporting activities, and to clarify change of voluntary activities and consciousness change of inhabitants. So this study investigated the activities at Tanose village in Minamiaizu town, Fukushima prefecture. The conclusions are:

- 1) The supporting activities grew inhabitants voluntary activities. Especially many voluntary activities were grown on "Farmers' Market".
- 2) The Inhabitants voluntary activities were increased by the supporting activities.
- 3) Most inhabitants improved their consciousness and became to be positive for the activities.
- 4) Effects of the supporting activities are improving their consciousness, increasing inhabitant actions and growing voluntary activities.

Keywords : Supporting Activity, Collaboration, Hilly rural areas, Village, Consciousness Change, University

支援活動, 協働, 中山間地域, 集落, 意識変化, 大学

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

近年の中山間地域における過疎化・高齢化の進行は、地域の生活環境維持機能や社会活動の低下をまねいている。特に存続が危ぶまれている限界集落^{注1)}と呼ばれるところでは、集落維持機能が著しく低下し、農地の放棄や山林の荒廃といった問題が深刻化している¹⁾。これらは国土利用上の問題であると共に、住民にとっては生活に関わる切実な問題であるため、いくつかの集落では住民や自治体による集落維持を模索する活動が始まっている。

このような現状に対し、大学やNPO、コンサルタント(以下: コンサル)などの第三者機関が住民や自治体の集落維持・活性化を協働で支援する活動(以下: 集落支援活動)が出てきている^{注2)}。これらは、集落の維持・活性化への寄与が期待されているが、第三者機関が行う集落支援活動の効果に関しては十分に明らかにされていない。

ところで、福島県南会津町では、集落の立候補制にもとづき、大学、コンサル、行政が連携した集落支援活動を2004年から行っている。その結果、「たのせ集落」といった自発的に集落維持・活性化活動に取り組むところが出てきている。

そこで本研究では、南会津町たのせ集落での活動を事例として、

集落支援活動による自発的活動の発生、世帯主住民の活動への取り組み方の変化、活動への意識変化を明らかにすることにより、集落支援活動の効果について考察することを目的とする。

1-2. 研究の位置づけ

中山間地域における都市農村交流による効果、手法に関する研究²⁾は多くなされているが、集落支援活動の効果に着目した研究はない。また、住民の意識変化に関する研究³⁾もなされているが、集落支援活動に対する意識変化を明らかにした研究はない。

以上のことを踏まえて本研究では、集落支援活動による住民の自発的活動の発生、活動への取り組み方の変化、意識変化に着目する。

1-3. 研究の方法

まず、研究対象地であるたのせ集落の概要を説明した後、たのせ集落で行っている集落支援活動の支援体制、活動の枠組み、活動経緯、活動内容を提示する。その上で、第1に集落支援活動による住民の自発的活動の発生、第2に、世帯主住民の集落支援活動・自発的活動への取り組み方の変化、第3に、世帯主住民の集落支援活動・自発的活動に対する意識変化を明らかにする。最後に、以上の結論を踏まえて、集落支援活動の効果を検討する。

調査にあたって、大学とコンサルが2004年度から作成している

*東日本高速道路株式会社

**芝浦工業大学工学部建築学科 教授・工博

East Nippon Expressway Company

Prof., Dept. of Architecture, Shibaura Institute of Technology, Dr. Eng.

「活動記録」^{注3)}を用いた。更に、世帯主住民へのヒアリング調査^{注4)}とアンケート調査^{注5)}を行った。

2. 研究対象地の概要

本章では、たのせ集落の位置する南会津町館岩地区の概要、たのせ集落の立地、人口変化、世帯状況を説明する。

2-1. 南会津町館岩地区の概要

南会津町館岩地区を図1に示す。南会津町は福島県南西部、栃木県との県境に位置し、平成18年に田島町・館岩村・伊南村・南郷村に合併して誕生した。旧館岩村にあたる館岩地区は、四方を標高1,500m級の山々に囲まれており、各集落の標高は650m～873mと高い。また、1970年に「過疎法」の過疎地域指定を受け、現在も過疎地域に指定されている⁴⁾。

2-2. たのせ集落の立地

たのせ集落を図2に示す。たのせ集落は館岩地区北西部に位置し、ほとんどの家屋が国道352号線沿いにある。集落は南北を山に挟まれ、東から西へ館岩川が通っている。国道352号線は尾瀬へ向かう観光客が多く利用していることから、観光客に農産物を販売できないかという意見があり、集落支援活動を希望することになった。そして集落支援活動を経て、2008年に駐車場とトイレを持つ「たのせ農村公園」^{注6)}が整備された。

2-3. たのせ集落の人口変化と世帯状況

たのせ集落の人口変化と世帯状況を図3に示す。たのせ集落の人口は、1960年は70人であったが、2010年では26人と大幅に減少している。世帯数は、1960年の14世帯に対し、2010年は12世帯とほとんど変化がなく、1世帯当たりの人員が激減している。

たのせ集落の世帯構成は、14人が65歳以上であり、高齢化率約54%と高齢化が進行している。また、単身世帯の3世帯は、すべて65歳以上の高齢者である。

たのせ集落では、農業を行っている世帯が4世帯あり、世帯Aが専業農家、世帯E、G、Hが兼業農家である。世帯Aは米、蕎麦、野菜類を生産している専業農家である。世帯E、G、Hは米のみを生産している兼業農家であるが、生産規模が小さい。その他の世帯でも農作物の生産を行っているが、自家消費を目的とした生産のみである⁵⁾。また、5世帯がすでに引退しており、年金のみの収入である。

3. 集落支援活動の方法

本章では、たのせ集落で行ってきた集落支援活動の支援体制と活動の枠組み、活動経緯、活動内容を提示する。

3-1. 支援体制と活動の枠組み

集落支援活動の支援体制と枠組みを図4に示す。活動はまちづくりが専門の芝浦工業大学(S研究室、M研究室)、樹木学が専門の東京農業大学(H研究室)(以下、大学)、コンサル(A建築研究所)、行政(旧館岩村、南会津町)の協働体制により行われている。

大学は、学識と学生による専門的助言と労働力支援、コンサルは全体の調整と活動の運営の補助、行政は活動資金の調達と集落との連絡調整の役割を担っており、各々の専門性を活かして役割分担している。また、芝浦工業大学高杖セミナーハウスが館岩地区内にあり、そこを宿泊と活動の拠点としている。

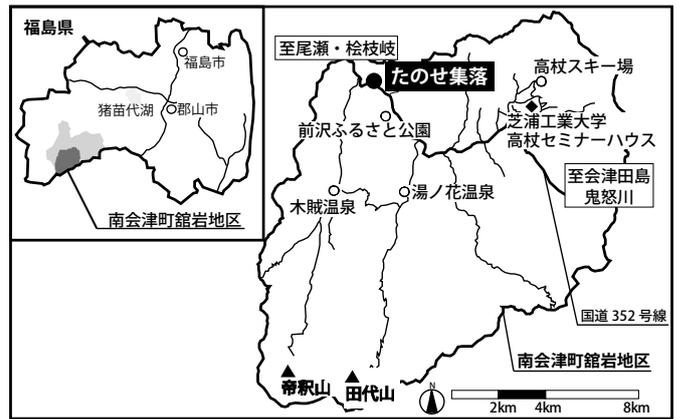


図1 南会津町館岩地区

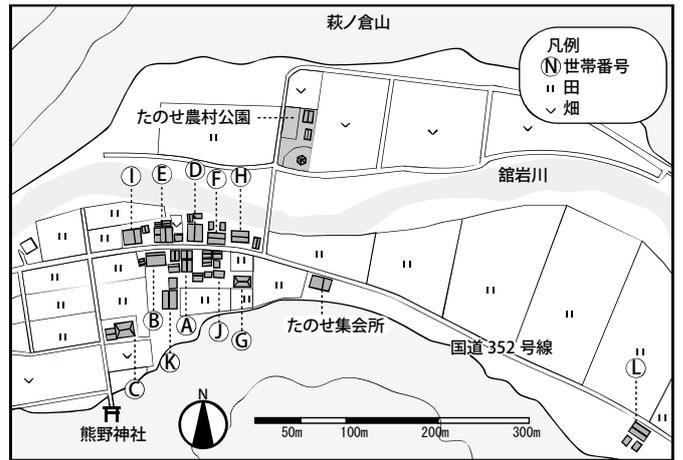


図2 たのせ集落

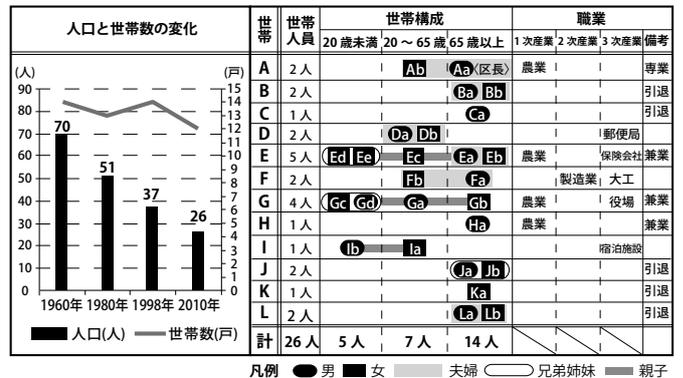


図3 たのせ集落の人口変化と世帯状況

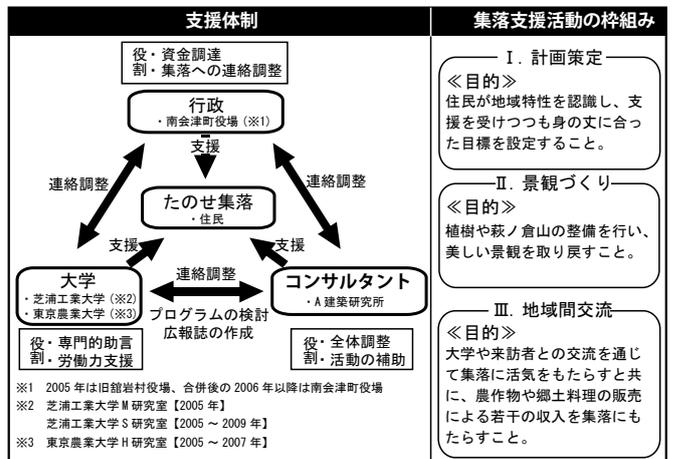


図4 集落支援活動の支援体制と枠組み

集落支援活動の枠組みは、「Ⅰ.計画策定」「Ⅱ.景観づくり」「Ⅲ.地域間交流」の3つに分けられる。計画策定は、住民が地域特性を認識し、支援を受けつつも身の丈に合った目標とそれへの到達過程を設定するために行われている。景観づくりは、計画策定によって設定された目標をもとに、植樹や萩ノ倉山の整備を行い、美しい風景を取り戻すために行われている。地域間交流は、計画策定によって設定された目標をもとに、大学や来訪者との交流を通じて集落に活気をもたらすと共に、農作物や郷土料理の販売による若干の収入を住民にもたらすために行われている。

3-2. 活動経緯

たのせ集落で行われた集落支援活動の活動経緯と参加者を表1に示す。集落支援活動は、たのせ集落の希望によって2005年5月5日に始まった。2005年度から2007年度は、計画策定と景観づくりを行った。計画策定として、集落の「全体計画」「景観づくり計画」の策定と「修正」、及び「活動成果の確認」を行った。景観づくりとして、「植樹」「萩ノ倉山の整備」「照明実験」を行った。2008年度から2010年度は、地域間交流として、「直売所運営の検討」「直売所」「学園祭出店」を行った。

集落支援活動には、住民、大学(学識、学生)、コンサル、行政が

表1 集落支援活動の経緯と参加者数

活動実施日 年度 月日	活動番号	集落支援活動の枠組み			参加者(人)					補助金	
		計画策定	景観づくり	地域間交流	住民	大学 学識	学生	コンサル	行政		計
2005	5/5 ①	全体計画 景観づくり計画			12	3	12	3	2	32	館岩村 (※1)
	10/9 ②		植樹		12	2	12	1	28		
	5/5,6 ③			萩ノ倉山の整備	6	3	18	3	0	30	
2006	9/2 ④	活動成果の確認 全体計画の修正 景観づくり計画の修正	照明実験		8	3	13	3	0	27	只見川 電線法 域協議 会 (※2)
	10/8,9 ⑤		植樹		6	1	6	1	0	14	
9/16 ⑥			植樹		0	3	13	2	2	20	
11/11 ⑦			萩ノ倉山の整備		6	1	9	2	0	18	
2007	1/28 ⑧	活動成果の確認 全体計画の修正			5	2	3	2	1	13	福島県 (※3)
	8/30 ⑨			直売所運営の検討	11	2	5	1	1	20	
2008	10/4 ⑩			直売所運営の検討	9	2	3	1	0	15	
	10/28 ⑪			直売所	18	0	11	2	0	31	
	11/1 ⑫			学園祭出店	8	1	10	0	0	19	
2009	2/7 ⑬			直売所運営の検討	11	2	4	2	2	23	
	7/25 ⑭			直売所運営の検討	3	1	7	2	0	13	
	8/8,9 ⑮			直売所	18	0	7	2	0	27	
	11/1,2 ⑯			学園祭出店	8	0	14	0	0	22	
	1/30 ⑰			直売所運営の検討	3	1	3	1	0	8	
2010	11/5,8,7 ⑱			学園祭出店	9	0	19	0	0	28	
計					153	27	169	28	9	358	

(※1) 『花の御宿の里づくり事業』により出資された。
(※2) 『奥会津景観保全事業』により出資された。
(※3) 『福島県地域づくり総合支援事業』にたのせ集落が申請し、補助金を受けた。

	計画策定	景観づくり			地域間交流	
		植樹等	萩ノ倉山の整備	直売所	学園祭出店	
日時	①2005年5月5日 ④2006年9月2日 ⑧2008年1月26日	②2005年10月9日 ④2006年9月2日 ⑤2006年10月8,9日 ⑥2007年9月16日	③2006年5月5,6日 ⑦2007年11月11日	⑪2008年10月26日 ⑮2009年8月8,9日	⑫2008年11月1日 ⑯2009年11月1,2日 ⑱2010年11月5,6,7日	
内容(※1)	・全体計画(①④⑧) ・景観づくり計画(①④) ・活動成果の確認(④⑧)	・オオヤマザクラの植樹(②⑤) ・照明実験(④) ・ヤマブキの植樹(⑥)	・カラマツの間伐(③⑥) ・地ごしらえ(③⑥) ・杉林の下枝切り(③⑥)	・農作物の販売(⑪⑮) ・郷土料理、特産品の販売(⑪⑮) ・餅つきイベント(⑱) ・ヤマメのつかみ取り(⑮)	・農作物の販売(⑫⑯⑱) ・郷土料理、特産品の販売(⑫⑯⑱)	
場所	・たのせ集会所(①④⑧) ※2	・熊野神社参道(②④) ・萩ノ倉山山裾(②⑤⑥)	・萩ノ倉山(③⑥)	・たのせ農村公園(⑪⑮)	・芝浦工業大学豊洲キャンパス(⑫⑯⑱)	
各主体の役割	事前	住民 大学 コンサル 行政	住民 大学 コンサル 行政	住民 大学 コンサル 行政	住民 大学 コンサル 行政	住民 大学 コンサル 行政
	当日	住民 大学 コンサル 行政	住民 大学 コンサル 行政	住民 大学 コンサル 行政	住民 大学 コンサル 行政	住民 大学 コンサル 行政
	事後	住民 大学 コンサル 行政	住民 大学 コンサル 行政	住民 大学 コンサル 行政	住民 大学 コンサル 行政	住民 大学 コンサル 行政
活動の様子						

図5 集落支援活動の内容

※1 ()の数字は活動番号
※2 集落集会所は、検討・策定の会場

参加し、各回 8 人から 32 人が参加している。延べ人数は、学生が 169 人と最も多く、次いで住民が 153 人と多かった。

3-3. 活動内容

集落支援活動の内容を図 5 に示す。

(I) 計画策定

計画策定では、2005 年度から 2007 年度の間、ワークショップ（以下、WS）方式で 3 回行った。地域資源の発見と成果の確認を目的とした里歩きと、たのせ集会所における意見交換を行った。内容は、「全体計画」「景観づくり計画」の策定と修正、「活動成果の確認」であった。

事前に、大学とコンサルが当日のプログラムの検討を行い、その後、大学は学生の募集と WS の準備、コンサルは全体調整、行政は住民への連絡を行った。

当日に、大学は学識と学生による専門的助言、記録、WS 運営補助、コンサルは全体調整と WS 運営補助を行った。

事後に、大学とコンサルで活動の反省とまとめを行い、その結果を広報紙にまとめた。この広報紙^{注7)}は、次の活動までに作成し、住民に配布した。

(II) 景観づくり

景観づくりでは、「植樹等」を 4 回、「萩ノ倉山の整備」を 2 回行った。「植樹等」では「オオヤマザクラの植樹」、「ヤマブキの植樹」を熊野神社参道と萩ノ倉山山裾で行った。「萩ノ倉山の整備」では、「カラマツの間伐」「地ごしらえ」「杉林の下枝切り」を行った。

事前に、大学とコンサルが当日のプログラムの検討を行い、その後、大学は学生の募集と作業道具の準備、コンサルは全体調整、行政は住民への連絡と苗など必要備品の準備を行った。

当日に、大学は学識と学生による専門的助言、記録、労働力支援、コンサルは全体調整と労働力支援を行った。

事後に、計画策定と同様に、大学とコンサルで活動の反省とまとめを行い、その結果を広報紙^{注7)}にまとめ、住民に配布した。

(III) 地域間交流

地域間交流は、「直売所」が 2 回、「学園祭出店」が 2 回行われ、「直売所」はたのせ農村公園で「直売所の開設」、「学園祭出店」は芝浦工業大学豊洲キャンパスで行われた。

事前に、直売所運営計画を検討し、「直売所」では、集落は会場の設営と販売物の準備を行い、大学は広報用のチラシとのぼりの作成、

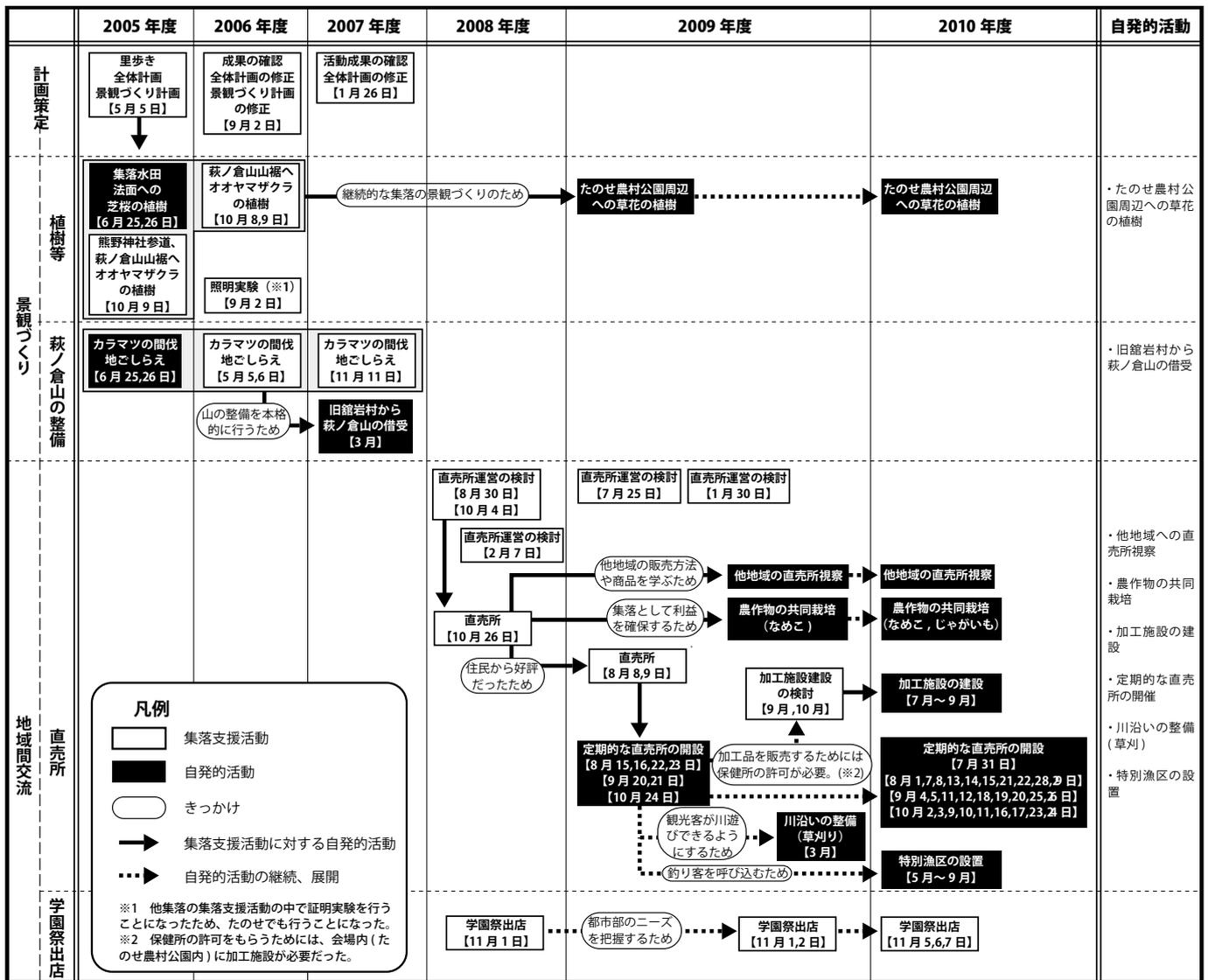


図 6 集落支援活動と自発的活動

コンサルは全体調整、行政はテントなどの備品の貸出や町の広報紙に開催告知を掲載した。「学園祭出店」では、集落が販売物の準備を行い、学生が学園祭実行委員会との調整、大学周辺住民への告知用チラシの作成と配布、当日の参加学生の確保を行った。

当日に、住民が活動を行った。大学とコンサルは、各役割の運営補助と記録を行った。

事後に、大学とコンサルで活動の反省と提案をまとめ、その反省と提案をまとめた広報紙^{注7)}をもとに、WS形式で意見交換を行った。

4. 集落支援活動による住民の自発的活動

本章では、活動記録とヒアリング調査^{注4)}より、集落支援活動による自発的活動の発生について明らかにする。集落支援活動と自発的活動を図6に示す。

4-1. 計画策定

計画策定では、集落支援活動後に自発的活動は発生しなかった。

4-2. 景観づくり

景観づくりでは、集落支援活動で植樹を行った後、「たのせ農村公園周辺への草花の植樹」の自発的活動があった。これは、継続的な風景づくりを住民が意識したことにより行われた。また、萩ノ倉山の整備を行った後、「旧館岩村から萩ノ倉山の借受」の自発的活動があった。しかし、これらの他に自発的活動はなかった。これは、労働力や資金不足が原因と考えられる。

4-3. 地域間交流

地域間交流の直売所では、2009年度から「他地域の直売所視察」、「農作物の共同栽培」、「定期的な直売所の開設」、「川沿いの整備」の自発的活動があった。「他地域の直売所視察」は、集落で毎年行っていた集落旅行に他地域の直売所の見学を含めたためである。2008年

度から毎年異なる地域の直売所を見学しており、この視察には全住民が参加している。「農作物の共同栽培」は、集落の利益を確保するためのものである。「定期的な直売所の開設」は、2008年度の直売所が住民から好評であったためである。「川沿いの整備」は、集落を流れる館岩川の河原を整備し、川遊びに来る観光客を直売所に引き込むためのものである。

2010年度では、自発的活動は、「特別漁区の設置」、「加工施設の建設」に展開した。「特別漁区の設置」は、集落内の館岩川を特別漁区として魚を放流することにより、直売所に釣り客を呼び込むためである。「加工施設の建設」は、農作物販売だけでなく加工した農作物や郷土料理を販売したことにより、保健所から加工施設建設を求められたため、2009年度に大学とコンサルによる「加工施設建設の検討」が行われた。その結果、「加工施設の建設」が行われた。

2008年度以降、自発的活動の中心となった直売所の展開を図7に示す。販売物は、2008年度は27種類だったが、2009年度は77種類、2010年度は75種類となった。また、2008年度は、農作物と特産品だけだったが、2009年度は、住民手作りの工芸品も販売し始め、2010年度は、漬物などの加工品も販売し始めた。

出品物の販売手数料は、2008年度は設定していなかったが、2009年度は売上の10%、2010年度は住民では売上の10%、他集落の住民では売上の15%に設定した。

販売手法では、2009年度に木製棚が住民によって制作され、木製棚を使った販売を行い始めた。

広報は、2008年度では大学からの提案によるのぼりとチラシだけであったが、2009年度から独自のチラシの作成、看板の制作、釣り客へのはがきによる告知を行い始めた。

加工施設建設は、先に述べたきっかけで始まり、2009年秋から集落がコンサルへ加工施設建設の相談し、集落が行政へ補助金を申請、コンサルが設計を行い、2010年度に加工施設が建設された。建設費の削減のため、基礎工事など住民のできる作業は住民によって行われた。

その他として、農家民宿が行われている^{注8)}。

4-4. 小結

本章では、集落支援活動により、景観づくり・地域間交流において住民の自発的活動が発生したことを明らかにした。特に地域間交流の「直売所」では、自発的活動が多く発生した。これは、成果の見えやすい活動や観光客といった来訪者と触れ合う活動が、住民にとって取り組みやすかったためと考えられる。計画策定においては、自発的活動は発生しなかった。これは、住民に計画策定のための専門的知識がなかったためと考えられる。

5. 世帯主住民の活動への取り組み方の変化

本章では、全世帯主住民へのヒアリング調査^{注4)}により、世帯主住民の活動への参加回数の変化、そして自発的活動が多く発生した地域間交流の「直売所」活動に着目し、直売所・学園祭出店の出品回数と出品物の種類の変化、関連作業の有無を分析することで、世帯主住民の活動への取り組み方の変化を明らかにする。世帯主住民の活動への取り組み方の変化を表2に示す。

5-1. 活動への参加回数

計画策定と景観づくりを行った2005年度から2007年度の3年間



図7 直売所の展開

表2 世帯主住民の活動への取り組み方の変化

住民	年齢	活動参加回数【※1】				直売所・学園祭出店への出品回数			直売所・学園祭出店への出品物の種類			直売所・学園祭出店の関連作業		取り組み方の変化【※3】			
		計画策定量概づくり 2005～2007年度		地域間交流 2008～2010年度		参加 回数 の増減	2008 年度 (2回)	2009 年度 (10回)	2010 年度 (20回) 【※2】	出品 回数 の増減	2008 年度	2009 年度	2010 年度 【※2】		出品物 の種類 の増減	自己に関して	活動全体 に関して
		計 (8回)	参加率	計 (44回)	参加率												
Aa	70歳	8	100%	26(↑)	59(↓)	○	1	9(↑)	1(↓)【※4】	△	2	9(↑)	2(↓)【※4】	△	【加工品(漬物)の販売準備】準備 【試食の設置】当日	【企画】	①リーダー化
Ba	84歳	1	12%	17(↑)	38(↑)	○	1	1(-)	3(↑)	△	1	2(↑)	4(↑)	○	×	×	③協調化
Ca	78歳	6	75%	35(↑)	79(↑)	○	0	0(-)	0(-)	×	0	0(-)	0(-)	×	×	×	④関与化
Da	81歳	6	75%	41(↑)	93(↑)	○	0	9(↑)	17(↑)	○	0	18(↑)	27(↑)	○	【加工品(漬物、おにぎり)の出品】準備 【売れ筋商品の分析】準備 【試食の設置】当日	【企画】	①リーダー化
Ea	73歳	0	0%	27(↑)	61(↑)	○	1	8(↑)	15(↑)	○	2	7(↑)	21(↑)	○	【売れ筋商品を分析】準備	×	②積極化
Fa	86歳	4	50%	24(↑)	54(↑)	○	2	9(↑)	12(↑)	○	6	21(↑)	20(↓)	△	【工芸品を製作し販売】準備 【旬の商品を親戚から仕入れて販売】準備	×	②積極化
Ga	56歳	3	37%	19(↑)	43(↑)	○	2	10(↑)	16(↑)	○	4	15(↑)	16(↑)	○	【売れ筋商品の分析】準備 【売行きにより量を調整】当日	【会計】	①リーダー化
Ha	73歳	6	75%	18(↑)	40(↓)	○	0	0(-)	0(-)	×	0	0(-)	0(-)	×	×	×	④関与化
Ia	52歳	3	37%	14(↑)	31(↓)	○	0	0(-)	3(↑)	△	0	0(-)	4(↑)	△	×	×	③協調化
Ja	84歳	4	50%	22(↑)	50(-)	○	2	7(↑)	7(-)	△	3	9(↑)	6(↓)	△	×	×	③協調化
Ka	88歳	5	62%	19(↑)	43(↓)	○	0	0(-)	0(-)	×	0	0(-)	0(-)	×	×	×	④関与化
La	82歳	6	75%	23(↑)	52(↓)	○	1	3(↑)	0(↓)【※5】	△	3	5(↑)	0(↓)【※5】	△	×	×	③協調化

凡例 (↑) 増加 (↓) 減少 ○ 増加のみ △ 増加がある × なし
 【※1】2005～2007年度は集落支援活動のみの参加回数、2008～2010年度は集落支援活動と2010年10月24日までの直売所の参加回数
 【※2】2010年度は2010年7月9日26日までの出品回数、出品物の種類
 【※3】取り組み方タイプは、直売所・学園祭出店の関連作業、直売所・学園祭出店への出品回数と出品物の種類、参加回数の増加の有無から分類した。
 【※4】本業である農業が忙しかったため、減少した。
 【※5】怪我により減少した。

では、活動回数が8回と少なく、1回も参加していない世帯主住民もいる。しかし、地域間交流を行った2008年度から2010年度の3年間では、活動回数が44回と大幅に増え、すべての世帯主住民の活動への参加回数も増加した。

住民Ca、Daは、2005年度から2007年度と2008年度から2010年度ともに75%以上の参加率であった。また、住民Ba、Eaは、2005年度から2007年度はほとんど参加していないが、2008年度から2010年度は参加回数が大幅に増加した。

5-2. 直売所・学園祭出店への出品回数

2008年度から2010年度で9世帯が増加した。特に、住民Da、Ea、Fa、Gaは毎年大幅に増加した。住民Aa、Laは2009年度から2010年度で出品回数が減少した。

5-3. 直売所・学園祭出店への出品物の種類

2008年度から2010年度で、出品を行っている9世帯すべて増加した。特に、住民Da、Ea、Fa、Gaは出品物の種類が多く、この住民は直売所への出品回数も多い。

5-4. 直売所・学園祭出店の関連作業

ここでは、「自己に関する作業」と「全体に関する作業」について調査した。まず、自己に関する作業については、住民Aa、Da、Ea、Fa、Gaが行った。住民Aaは、事前に農作物を漬物に調理、販売し、当日は農作物の試食を用意し売行きの向上を図った。住民Daは、農作物の漬物やおにぎりへの加工や直売所の売れ筋商品の分析、試食の実施を行った。住民Eaは、売れ筋商品の分析を行った。住民Faは、木を加工した工芸品の製作や農家の親戚から仕入れた旬の商品を販売した。住民Gaは、売れ筋商品の分析や集落内の直売所である立地を活かし、当日の売行きにより量の調整を行った。

全体に関する作業は、住民Aa、Daが企画を行い、住民Gaが会計を行った。

5-5. 活動への取り組み方の変化

前節までの分析である、活動への参加回数の変化、直売所・学園

祭への出品回数・出品物の種類の変化、全体と自己に関する関連作業の有無から、世帯主住民の取り組み方の変化は、「リーダー化」「積極化」「協調化」「関与化」に分類できることが分かった。

①リーダー化

リーダー化は、直売所・学園祭出店への全体と自己に関する関連作業を行い、出品回数と出品物の種類が増加したタイプであり、住民Aa、Da、Gaが該当する。活動への参加回数や出品回数も多く、他の住民の模範になっていると考えられる。

②積極化

積極化は、直売所・学園祭出店への自己に関する関連作業を行い、出品回数と出品物の種類が増加したタイプであり、住民Ea、Faが該当する。出品回数や出品物も他の住民に比べ多い。しかし、2005年度から2007年度の参加回数は少なく、特に住民Eaは一度も参加していない。活動の途中から積極的になった住民である。

③協調化

協調化は、直売所・学園祭への出品回数と出品物の種類が増加したタイプであり、住民Ba、Ia、Ja、Laが該当する。出品回数や出品物の種類は多くないが、出品を行っている協力的な住民である。

④関与化

関与化は、直売所・学園祭出店への出品は行っていないが、当日の売り子や交通整理として活動に関与したタイプであり、住民Ca、Ha、Kaが該当する。3人とも単身世帯であることから、農作物の生産量が少なく、出品できないと考えられる。また、住民Caは活動参加回数が特に多く、全活動に積極的に参加している。

以上のように、活動への取り組み方の変化は、住民それぞれの年齢、世帯構成、農作物生産といった状況に合わせて違いがあるものの、総じて集落支援活動によって活発化したと言える。

6. 世帯主住民の意識変化

本章では、世帯主住民の意識変化をアンケート調査^{注5)}により明

表3 世帯主住民の意識変化

世帯主	設問Ⅰ 大学やコンサルが支援に来ることについて			設問Ⅱ 集落で活動していくことについて			設問Ⅲ 今後の活動について		意識変化	
	当初	現在	変化した理由	当初	現在	変化した理由	活動への参加理由	現在		理由
Aa	○	○		○	○			○	他地域の取り組みも参考にしながら、様々な人の協力を得て活動していきたい。	→
Ba	○	○		×	○	高齢化などの問題はあるが、集落で活動することは良いことだと思ふから。	当初：集落内の付き合い。 現在：皆が協力して頑張っているため。	○	小さな集落だからこそ、皆が協力しなければならぬ。	↗
Ca	○	○		○	△	5年間経つ中で、徐々に体力的に厳しくなってきたから。	当初/現在：住民Daが献身的にやっているため。	○	住民Daが献身的にやっているため。	↘
Da	○	○		○	○			○	今後は高齢者の負担を減らし、加工技術向上などソフト面に取り組んでいきたい。	→
Ea	×	○	学園祭に参加し、学生と交流できた。	×	○	直売所を続けてきて、活動が行いやすくなったから。	当初：皆が参加し始めたため。 現在：少ないと活動が大変なため。	○	規模が大きくなると負担が大きくなるので、できる範囲で取り組んでいきたい。	↗
Fa	△	○	活動していく中で変わってきた。	×	○	直売所を続けてきて、住民Daを始め、皆が協力して頑張っているから。	当初/現在：皆で協力して頑張っているため。	○	皆が協力して頑張っているから。	↗
Ga	△	○	半信半疑だったが、成果が見えてきた。	△	○	各活動を続けてだんだんと変わってきたと思う。	当初：まず、やってみようと思った。 現在：みんなでやらないと意味がない。	○	自分の世代が頑張らなければいけないと感じるから。	↗
Ha	○	○		△	○	役割分担ができてきているため、活動しやすくなったから。	当初/現在：皆で協力して頑張っているため。	○	皆が協力して頑張っているから。	↗
Ia	△	○	今まで学生との交流がなく不安だったが、交流を通じて、今はぜひ来てほしいと思う。	×	○	大きく変わったのは直売所。みんなで行ったことが結果として現れた。	当初：皆が参加し始めたため。 現在：住民同士で会話ができて、楽しい。	○	自分のできる範囲で手伝いをしたい。自分が役に立っているという実感がうれしい。	↗
Ja	○	○		×	△	皆高齢だし続けていくことは難しい。	当初/現在：皆で協力して頑張っているため。	○	皆が協力して頑張っているため。	↗
Ka	○	○		×	○	活動することに慣れてきた。	当初/現在：一人で家にいるよりみんなと話すことが楽しい。	○	皆が協力して頑張っているため。	↗
La	○	○		○	○		当初：皆が参加し始めたため。 現在：住民Daが頑張っているため。	○	皆が協力して頑張っているため。	→
回答	◎：ぜひ来てほしい ○：どちらかといえば来てほしい △：どちらかといえば来なくてよい ×：来なくてよい			◎：できる ○：どちらかといえばできる △：どちらかといえばできない ×：できない			A：活動の企画や運営にも関わってほしい B：できる限り関わってほしい C：あまり関わりたくない D：関わりたくない			
集計	当初 4人 現在 7人			当初 3人 1人 2人 現在 5人			当初 3人 現在 9人			

変化した項目

らかにすると共に、前章で明らかにした活動への取り組み方変化と意識変化との関係を分析する。世帯主住民の意識変化を表3に示す。

6-1. 大学やコンサルが支援に来ることについて

大学やコンサルが支援に来ることについて、集落支援活動当初は、△：「どちらかといえば来なくてよい」、×：「来なくてよい」が計4人いたが、現在では全くなり、◎：「ぜひ来てほしい」、○：「どちらかといえば来てほしい」が全世帯主12人となった。

変化した住民は、住民Ea、Fa、Ga、Iaであり、変化した理由は、「学生や学識、コンサルと交流できたから」というような理由が2人、「活動の成果が見えてきたから」というような理由が2人であった。

6-2. 集落で活動していくことについて

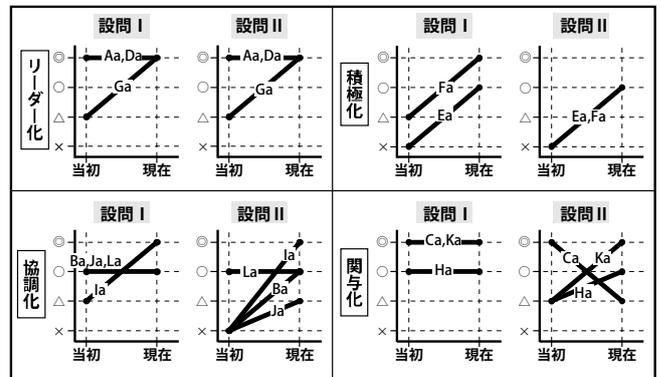
集落で活動していくことについて、集落支援活動当初は、△：「どちらかといえばできない」、×：「できない」が計8人いたが、現在は△：「どちらかといえばできない」が計2人と減少した。

変化した理由は、「活動を継続して行う中で活動を行いやすくなったから」というような理由が最も多い。また、現在△：「どちらかといえばできない」と考えている住民Ca、Jaの変化した理由は、「5年経つ中で皆高齢になり、活動に参加し続けることが難しいから」といったような理由であった。

活動への参加理由は、「集落内の付き合い」や「皆が参加しているため」といった理由が多く、その背景には、集落協同体慣習「結い」注9)の存在があると考えられる。しかし、現在では、参加理由が変化し、自身の動機が出てきている。

6-3. 今後の活動について

今後の活動について、住民Aa、Da、Gaは、◎：「活動の企画や運営にも関わってほしい」と考えており、その他の世帯主住民は、○：「できる限り活動に関わってほしい」と考えていた。設問Ⅱの回答を含め、「皆が頑張っているから」といった参加理由が多いことから、多くの住民が参加していることが、住民全体の意識向上につながっていると言える。特に「住民Daが献身的に取り組んでいるため」という参加理由が3人にあり、住民Daのような積



※ 設問Ⅰ、設問Ⅱ、◎、○、△、×については表2を参照。

図8 取り組み方変化と意識変化との関係

極的な取り組み方が、住民の意識向上を強く則していると言える。

6-4. 取り組み方変化と意識変化の関係

5章で行った取り組み方変化と意識変化との関係を図8に示す。

「リーダー化」の住民Aa、Daは、当初から現在まで高い意識を持っていたため変化していないが、住民Gaは意識が向上して「リーダー化」した。

「積極化」の住民Ea、Faは、設問Ⅰ、設問Ⅱともに当初に比べ向上しており、集落支援・自発的活動を行う過程で積極的になった。

「協調化」の住民は、ほとんど意識が向上した。設問Ⅰでは住民Iaが向上しており、設問Ⅱでは住民Ba、Ia、Jaが向上した。しかし、住民Laは当初から意識が高く、変化がなかった。

「関与化」の住民は変化が様々であった。設問Ⅰは変化がなかったが、設問Ⅱでは住民Ha、Kaは意識が向上した。住民Caは意識が低下しているが、その理由は先に述べたように、住民の高齢化である。

6-5. 小結論

本章では、集落支援活動を通じて、全ての世帯主住民が大学やコンサルの支援に対して抵抗感をもちなくなり、またほぼ全ての世帯主住民が活動していくことを可能と考えるようになり、今後の活動

についても積極的になっていることを明らかにした。つまり、全ての世帯主住民が集落支援活動と自発的活動に対して肯定的、積極的になり、活動に対する意識が向上したと言える。また、意識が向上した理由として、リーダー化といった積極的な住民の取り組みへの賛同が多かった。

住民の取り組み方変化との関係では、高い意識の維持あるいは意識向上により取り組みがリーダー化した住民、また意識向上により取り組み方が積極化した住民、あるいは部分的な意識向上により協調化、関与化した住民があった。

7. まとめ

本研究では、福島県南会津町たのせ集落での活動を事例として、集落支援活動による自発的活動の発生、世帯主住民の活動への取り組み方の変化、意識変化について、以下のことを明らかにした。

- ・集落支援活動によって、景観づくり、地域間交流において、住民の自発的活動が発生した。特に地域間交流の「直売所」では、自発的活動が多く発生した。これは、成果が見えやすい活動で、観光客といった来訪者と触れ合う活動が、住民にとって取り組みやすかったためと考えられる。また計画策定においては、自発的活動の発生はなかった。これは、住民だけでは専門的知識がないので、活動でできなかったためと考えられる。

- ・全世帯主住民の集落支援・自発的活動への参加回数は増加した。「直売所・学園祭出店」では出品回数、出品物の種類が増加し、独自の個別な工夫が発生している。さらに「直売所」については、役割分担も発生していた。これらのことから、世帯主住民の取り組み方は活発化し、その変化には、「リーダー化」「積極化」「協調化」「関与化」のようなタイプがある。

- ・集落支援活動を通じて、全ての世帯主住民が大学やコンサルの支援に対して抵抗感をもちなくなり、またほぼ全ての世帯主住民が活動していくことを可能と考えるようになり、今後の活動についても積極的になった。つまり、全ての世帯主住民の活動に対する意識が向上したと言える。意識が向上した理由としては、リーダー化といった積極的な住民の取り組みへの賛同が多かった。意識向上により、住民の取り組み方は、リーダー化、積極化、協調化、関与化と活性化した。

以上のことから、住民の自発的活動の発生、住民の活動への取り組み方の活発化、活動に対する意識向上という点において集落支援活動は効果があったと言える。それは、集落支援活動を通じて住民の意識が向上し、意識向上によって住民の活動への取り組み方が、リーダー化や積極化、協調化、関与化と、住民それぞれの状況と意識向上具合によって活発化した。その結果、自発的活動が発生したと考えられる。そのような過程を踏んでいくため、集落支援活動の効果が現れるには数年間を要することになる。本事例では、大学の地域貢献活動によって6年間、館岩地区としては7年間にわたる継続的な集落支援活動が実現している。その結果、集落支援活動の効果が現れた。効果を発揮する集落支援活動のためには、集落が集落支援活動を希望することを前提として、今後本事例のような長期間継続可能な協働の体制づくりが必要である。

謝辞

ヒアリング調査、および、アンケート調査にご協力いただいた南会津町たのせ集落の皆様、またアルセッド建築研究所の皆様には、この場を借りて深く御礼申し上げます。

注

- 注1)「限界集落」という用語については、必ずしも明確な定義が確立しているとはいえないが、代表的なものとして、大野晃氏（長野大学教授、高知大学名誉教授）による以下の定義がある。『65歳以上の高齢者が集落人口の半数を超え、冠婚葬祭をはじめ田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難な状態に置かれている集落』[大野晃「限界集落—その実態が問われるもの」 農業と経済,昭和堂,2005.3より 引用]
- 注2)例えば岩手県大野村における東京大学の取り組みがある。[野原卓「中山間地域における「地域力」づくり戦略」季刊まちづくり12,2006.10]
- 注3)活動記録は、研究室で記録した議事録、各活動をまとめた広報誌、集落作成の補助金への提出資料を用いた。
- 注4)ヒアリング調査は、2010年10月から12月に全世帯主住民12人に実施した。
- 注5)アンケート調査は、2010年12月12日、13日に全世帯主住民12人に実施した。
- 注6)「たのせ農村公園」は、たのせ集落が南会津町から管理者として指定を受け、集落全住民で管理を行っている。また、たのせ集落が管理者に指定されたことにより、農村公園を活用することが可能となった。
- 注7)広報紙は、「花の御宿の里便り」と呼ばれ、各集落支援活動で作成された。活動を振り返るとともに、計画のまとめとしても役立つ。
- 注8)農家民宿とは、農林漁業体験民宿業の呼称であり、施設を設けて人を民宿させ、農林水産省令で定める農村滞在型余暇活動又は山村・漁村滞在型余暇活動に必要な役務を提供する営業をいう。[福島県観光交流局観光交流課「農家民宿開設のてびき」,2008より引用] たのせ集落では、2010年度に3世帯が農家民宿による受入を行っている。
- 注9)「結い」とは、田植えなどの時に互いに力を貸し合うこと。[広辞苑より引用]

参考文献

- 1)小田切徳美他:限界集落における集落機能の実態等に関する調査報告書,財団法人農村開発企画委員会,2006.3
- 2)酒井俊之他:中山間地域における都市農村交流事業の創出手法に関する研究-「発見型交流創出手法」を事例として-,日本建築学会技術報告集第24号,pp.355-359,2006.12
- 3)村田義郎他:参加型計画づくりにおける住民と行政の意識及び計画内容の変容過程についての考察-ワークショップによる都市計画道路及び水辺空間整備計画策定(柳井市)を事例として-,日本都市計画学会都市計画論文集No.35,pp.865-870,2000.10
- 4)館岩村史編さん委員会:館岩村史 第一巻 通史編,館岩村,1999
- 5)黒沼剛他:中山間地域における集落の実態と展望に関する研究(1)-福島県南会津町たのせ集落の世帯構成と農業-,日本建築学会大会学術講演梗概集E-2分冊,pp.527-528,2009
- 6)松島祐司他:中山間地域における集落の実態と展望に関する研究(2)-福島県南会津町たのせ集落における直売所実験と地域交流-,日本建築学会大会学術講演梗概集E-2分冊,pp.529-530,2009
- 7)黒沼剛他:多様な主体が連携する集落の自立支援活動とその展開-福島県南会津地域を事例として-,日本建築学会大会学術講演梗概集E-2分冊,pp.527-528,2010
- 8)黒沼剛他:セミナーハウスを拠点とした多様な主体が連携するむらづくり-福島県南会津地域を事例として-,2009年度日本建築学会大会(東北)農村計画+都市計画部門パネルディスカッション資料,pp.30-33,2009.8
- 9)倉田康夫他:中山間地域における大学支援を基盤とした集落単位によるむらづくり計画策定に関する研究-福島県南会津郡館岩村を事例として-,日本建築学会大会学術講演梗概集F-1分冊,pp.71-74,2006
- 10)山口太郎他:まちづくり活動主体の自立プロセスと自治体シンクタンクの役割に関する研究-神奈川県小田原市政総合研究所を事例として-,日本建築学会計画系論文第587号,pp.135-141,2005.1